

見拝の技の伝統

工業の機械化が進む中、手仕事を守り続ける人たちがいます。私たちの身近にも、古くから伝えられた技術に誇りとこだわりを持つ職人さんがたくさんいます。今回は、区内で活躍する職人さんをご紹介します。

畳職人

廣森 利栄さん

「(有)廣森畳店」(東苗穂八一二)の廣森 利栄さん(52)が畳職人として修業を始めたのは十五歳の時。それから四十年近くがたち、時代とともに畳職人の仕事はずいぶん変化したそうです。作業の機械化が進み、昔は一日に十二枚くらいしか作れなかった畳を、四十枚ほども作ることもできるようになりました。全ての行程を機械で行うこともできますが、廣森さんは今でも、ごごの縫い付け以外は手作業をしています。廣森さんが日に焼けて茶色くなった畳の表面をはがし、新しいごごをかぶせて糸でかがると、古かった畳は、見違えるような青畳に生まれ変わります。イ草のよい香りが郷愁を誘います。

「畳は日本の文化です。この仕事は長く続けていきたいですね」という廣森さん。現在市内には百五十軒ほどの畳店がありますが、職人さんの多くは高齢で、廣森さんは若手に入るそうです。

「地味な仕事だから、今の若い人はやりたがらないんじゃないでしょ

うか。どこも後継者には苦労しているようです」と話す廣森さん自身は二代目。お父さんも畳職人でした。そして今、店内には、三代目の大介さん(23)の姿があります。大介さんは「この仕事を始めてまだ三年。仕事の面白みはこれから出るとおもいます」と話します。

利栄さんが張り替えた畳に、大介さんが縁を付けて仕上げます。畳針が機械に、イ草が外国産に変わっても、ここでは変わらぬ職人技が、父から子へと伝えられています。

「地域に密着した、『まちの畳屋さん』でありたい」という願いも、次代へ受け継がれていくことでしょう。



▶鮮やかな手付きで畳の表替えをする廣森さん。長年培った技術が、美しい畳を作ります。知事公館の畳の張り替えも、廣森さんが手掛けました

◀黙々と作業をこなす大介さん。大介さんが家業を継ぐことを決めたとき、初代のおじいさんは大喜びしたそうです

